

MYD Makoto
Yamaguchi
Design

序文

結晶化する建築

紀貫之はかつての平安・日本文化の創始者であった。この時代に生きる山口誠の建築作品に見られるその手法には、単にジャンルの違いのみならず、千年という時間までもを飛び越えて、貫之の憑依といえるほどに、この歌人のそれに酷似している。それでは紀貫之とは一体誰であったのか。

9世紀末、日本は中国への使節・遣唐使を廃止し、鎖国状態に入る。それからわずかに十数年を経て、紀貫之が『古今集』を編纂する。ほぼ、これを境に、貴族たちは金銀、宝石等の宝飾品を一切、身につけなくなる。世界最古の長編小説『源氏物語』において、日本のカサノバとも言えるべきその主人公・光源氏がうかつにも手を出してしまう醜女・「末摘む花」にふさわしい所有物として、かつて大陸から輸入された、本来は豪華な、しかしすでに流行遅れとなった、ダサい「毛皮」を敢えて着せる。「唐めく」という言葉が、「流行の最先端」から、「キザ」の意味に変わる。それまでの堅牢な骨格を持った立体的な大陸風の三筆の書が、三蹟の平面的であてやかかつ繊細な和風のそれに変わる。これらに共通して見られるのは、実はすべて、貫之の編纂した日本最初の勅撰和歌集『古今集』が先取りした結果か、もしくは、そこに源をもつ派生的現象である。

『古今集』には、際立った幾つかの主知的ともいえる、日本的な美学理念が隠されている。そのうちに対極を内包する大陸由来の「対句」なるものを、類似するものを延長的に連結する「縁語」に変換すること。ひとつの言葉において二つの意味を並行させる掛詞を多用すること。大陸における代表的な花である「梅」と「牡丹」が、その花の形態も開花時期も全く異なる対照的な花であるのに対して、わが国の「梅」と「桜」は、相互にきわめて類似しているにもかかわらず、敢えてそれを並行二者として別個の性格を持つものとして歌い上げられたこと。とりわけ『貫之集』においては、水面に映る写像がもうひとつのヴァーチャル世界を開く徴として並行的に描出されている。あるいはそこでは時間というものが徹底的に空間化されて表現される。言い換えるならば、ここには、意識作用の物質世界からの自立が、大陸文化からの日本の自立の象徴として描き出されている。

ume plum flowers



このようにして、『古今集』では、それ以前に成立していた『万葉集』に見られる、実体的な自然の具体的に描写に基づく素朴な感情表現という、主客の相互依存的な二元性を超え出て、言語によって意識へと投影された自立的空間への結晶化が見られる。しかしながら、こうした文化の粋ともいえる、平安和歌は、その三世紀後には、新興勢力である武士の勃興とともに衰退し、こうした美学理念が彼らに継承されることはなかった。さらにその後、最後の武士の時代である江戸期には、本居宣長によって提唱された『古今集』とは正反対の、情緒による世界理解・「もののあはれ」として誤読され、著しく平板化される。続くところの明治期では、日本近代精神の推進役を一手に引き受けた正岡子規によって、『古今集』は非体験的文学として、その価値が全否定される。そしてヴァーチャルであることが決定的な意味を持つ21世紀を迎えた今、『古今集』は文学史上初めて、その真価が露わになる時代に入って来ている。

建築は空間をデザインすることである。しかし山口誠にとっては、そのことは最終的な目的となっていない。その建築空間がわれわれの意識へと投影した結果出来上がる、もうひとつの純粹空間こそが彼の目指すものである。対極を類似に変換すること、写像を実像に対峙させること、二つのものを繋げると同時に、またある時にはひとつのものを二つにすること、あるいは並行二者とすること、さまざまな側面で貫之を想起させる手法の駆使によるプロセスを通じて、建築本来の空間の上に、時間を超えたもうひとつの意識空間が並行的にたち現れてくる。それは、もはや建築ではないほどに、建築から浮きあがった、空間の結晶化であり、貫之が言語によって自立的空間への結晶化を果たした、平安日本の伝統の復古として、新鮮に蘇ってくるのである。

山田哲平

明治大学名誉教授

(比較詩史、比較美術史)

sakura cherry blossom



フィロソフィー

風景は、文学である



建築を通して、風景をつくります。

風景とは、自然の事象と、美しさをつかみとる
心によって像を結ぶものです。

古来、日本人は、宝石を身につけず、
色彩や芳香を纏うことで高貴さを示したと言います。

一千年前、日本で編纂された歌集には
目に見える物質の豊かさよりも
見えないものを尊ぶ精神が詠まれています。

雨、風、光、草花、時間、
その一点を主題にせず、すべてが並行して
存在していく風景の有様を平易な言葉で表しました。

これら日本詩歌の美的理念を継承することで
建築を通して、風景をつくります。

軽井沢の別荘 / ギャラリー

Project name: Villa / Gallery in Karuizawa
Structure: one story building, wood-frame construction,
reinforced concrete shell foundation.
Location: Karuizawa, Gunma Prefecture, Japan
Site area: 1360.54 sqm
Total floor area: 68.46 sqm
Completion: 2003



軽井沢は四季の豊かな表情を持つことで知られている。東京に住むオーナー夫妻はそこで森のなかの土地を購入して、一年を通じて豊かな時間を過ごすことができる小さな別荘をつくりたいと考えた。音楽家である2人は現代美術コレクターでもあり、友人を招いて小さな音楽会を催したり、美術作品を展示するギャラリーとしても使いたいと考えた。

その場所で、日常とは大きく異なる生活スタイルを実現できること、具体的には、手つかずの自然に囲まれた環境で、その外部の自然を四季折々楽しめるような驚きがあることを目指した。

美しい森のなかで、建築としてしっかりと固定されるのではなく、フワリと軽く着地しているように見せることで景観に溶け込んでいる。内部では住宅としての機能を感じさせないようにしている。どの場所にいても、視線と光が外の森に抜けて、繋がっていく。また、キッチンが床に掘込まれ、バスタブもコンクリートの床がその機能を果たしている。空間の機能が見えなくなり、室内が外と連続し、内部空間も「風景」となることを目指した。

House in Pakse

Project name: House in Pakse
Building type: Private house interior design
Structure: Reinforced concrete building of three stories
Location: Pakse, LAO.P.D.R
Lighting design: SIRIUS LIGHTING OFFICE
Total floor area: 1266.00 sqm
Completion: 2015



東南アジアのLaosにある、その第二の町Pakseは、手つかずの自然で広く名を知られている。とりわけ、ジャングルのような森のなかで無数に見られる、岩肌を背にした大小さまざまな滝が、周辺諸国からも多くの観光客をひきつけている。

敷地は東南アジアで最長の、雄大なメコン川に面している。ルネサンス時代のPallazzo様式を模した両翼をもつ巨大な住宅はタイ人建築家によって数年前に計画されたものである。本プロジェクトは、外観に変更を加えることなく、室内を彼女のために現代的なデザインとして計画することだった。

ラオスの地域性を感じさせる調和をつくることをデザインコンセプトとした。「素材」「設備」「Pallazzo様式」をいかに地域性として調和させるかを重視した。「素材」ではラオスらしさと現代性、「設備」では最先端と保守性(発展途上国であるラオスでは製品メンテナンスが困難なことが多い)、「Pallazzo様式」とインテリア等が具体的な検討事項となった。



株式会社山口誠デザイン

〒 106-0047

東京都港区南麻布 2-8-17 鳥海ビル 1F

www.ymgci.net

mail@ymgci.net

03 6436 0371

設立 2007 年

一級建築士事務所 東京都知事登録第 54347 号